

「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その 12)」

《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

中学時代の漢文授業<sup>(※1)</sup>高普1回卒 小島睦男<sup>(※2)</sup>

中学時代の先生の影響は大層大きい。その一つに中学時代の漢文がある。漢文は市村正二先生、橋川琢二先生、岩崎敏夫<sup>(※3)</sup>先生の授業を受けた。教科書は「論語」をはじめとする古典の名言、古人の言行を内容としているので、後々になっても教えられ、励まされ、慰められた。

市川先生の最初の授業は、近所に住む先輩小泉士郎<sup>(※4)</sup>さん(当時4年生)の助言に従って、「虎の巻」で予習していったので無事にパスした。これで漢文に対するアレルギーが無くなったのだと思う。

橋川先生は終戦後(中学3年生の時に終戦)、教科書の不自由な時代にプリントをつくられ、白楽天の長恨歌、「炭を売る翁宮市に苦しむ」「香炉峰下新たに山居をトシ」、杜甫の「春望」「哀江頭」、李白の「早に白帝城を発す」などの漢詩を教えられた。

岩崎先生の授業では「論語」を暗記させられた。どなたの授業か忘れたが、蘇東坡の「赤壁の賦」もあった。

漢文は故事が多く、国語の授業と違って大変面白かった。天が崩れ落ちはしないかと心配した杞の国の人のお話(杞憂)、切り株に兎がぶつかるのを待っていた宋人の話、間違いの言い逃れに石で口をすすぎ、流れを枕にするといった話(漱石枕流)、葉公龍を好む話、塞翁が馬、羊頭狗肉、百里行く者は九十里を半ばとす等々、先生の話の聞いていると授業が終わるのが早く感じられた。

「身体髪膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始めなり」の「毀傷」を「起床」ともじって、朝寝をした経験は皆さんもお持ちであると思う。

高校卒業の時、岩崎先生は生徒たちに「人生意気に感ず」(魏徴、述懐)と言葉を贈られた。ちなみに、宮本行二校長先生は「継続は力なり」と黒板に大書された。このお言葉もありがたく頂いている。

中学時代の漢文授業のお蔭で、社会人となり理科系の仕事に就いてからも、暇な時は唐詩選や史記(列伝)、十八史略、宗名臣言行録などを読んだ。格言の出典を知ったり、中国人の強烈な生き方に驚きを感じたり、種々教えられることが多かった。恥ずかしいが「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」(中庸)を座右の銘の一つにしてきた。最近5年程は、生きているうちにできるだけ中国古典や仏教書(特に禅関係)を読んでみようと市立図書館に通っている。

今の中学生や高校生は、漢文は選択科目のようであるが、中国古典や仏教は日本文化の基盤になっているので、ぜひ漢文を学んでほしいと思う。

(「茨城支部 40 周年記念報」平成 15 年より)

(※1) 相馬高校創立 120 周年記念誌『乗り越えて その先へ』(2018(平成 30)年 10 月発行)の「卒業生からの寄稿」より転載。

(※2) 昭和 24(1949)年卒、相高普第 1 回、坂元出身。

(※3) 昭和 2(1927)年卒、相中第 25 回、中村出身。

(※4) 昭和 20(1945)年卒、相中第 43 回、坂元出身。